column

# 大英図書館企画展「プロパガンダ―権力と説得」見学報告

「プロパガンダ―権力と説得」は、二〇一三年五月一七日～九月一七日に大英図書館の所蔵資料および機関・個人からの貸与資料など、約二〇〇点の国家プロパガンダを集めた企画展である。閲覧者の資料への興味を啓蒙すること、地域への貢献をアピールすること、職員の育成に役立つことなどを目的として多くの図書館が展示活動を行っている。世界的規模の歴史コレクションを誇る大英図書館の貴重な資料を活かし、イギリスのメディアでも好評だったこの展示を見学する機会を得たので報告したい。

大英図書館の社会科学コレクション部ジュード・イングランド部長とイアン・クック主席キュレーターが二年かけて外部の専門家とともに企画したもので、イギリス・ケント大学、戦争・プロパガンダ・社会研究センターのセンター長、ディヴィッド・ウェルチ教授が展示カタログを執筆している。（参考文献）太陽光が溢れる図書館ロビーを抜けて展示会場へと向かうと、薄暗い入口に顔のない黒いマネキンが向かい合って立っており、その体にはプロパガンダを語る先人たちのことばが書いてある。プロパガンダとは、ウェルチ氏の展示カタログによると、特定の方法で説得力のある特定の目的のために考え、行動するよう民衆を説得することを意図した観念の普及だという。紀元前四世紀ギリシャの銀貨に刻まれた統治者の肖像も広大な領土を治めるための正当性を印象付けるプロパガンダだった。元来「プロパガンダ」という言葉自体は宗教的であったらしい。一六世紀に宗教改革が起こり、政治的、宗教的勢力を失いつつあったローマカトリック教会は、自らを戒め、規律正しい宗教生活を維持することによってキリスト教の分裂を防ごうとした。そこで、Congregatio de Propaganda Fide（布教聖省）が宣教と教会活動を司る機関として設置され、その後、プロパガンダという言葉は様々な宣伝活動を指すようになったという。展示会場でひときわ目を引いたナポレオンの肖像画は、皇帝然とした赤いローブ、金の月桂樹の冠、カール大帝の王笏（おうしゃく）など権力の象徴が要所に描かれ、帝国の繁栄と彼自身を宣伝していた。

一九一四年に第一次世界大戦が始まると、プロパガンダは民衆の士気を高め、敵に対する世論を統制する手段として使われるようになった。「国があなたを必要としている」という標語のキッチナー・イギリス陸軍大臣が指を突き出した募兵用ポスターは多くの民衆を動員し、各国で模倣された。今回、大英図書館も標語を変えてこれを模倣し、展示グッズを作成していた。また、映画やラジオなどあらゆる媒体を利用したプロパガンダは英雄的な統治者のイメージを広め、個人崇拝を後押しする役割も果たした。ムッソリーニ、ヒトラー、スターリン、毛沢東の肖像画や映像は力強く明確なメッセージに溢れ、民衆を扇動する彼らの宣伝活動が巧みであったことがわかる。第二次世界大戦中にはプロパガンダ活動はますます活発化し、イギリス、ドイツ、米国などではその「フィードバック」機関も設けて、世論や公衆道徳を随時分析していたのに驚いた。またプロパガンダは、国家が募兵の必要から公衆衛生を向上させるのにも活用された。展示されていたポスターでは子供がハエに襲われていたり、泥酔した父親の傍で家族が泣いていたり、わかりやすく、感情に訴えるものが多い。イギリス政府のエイズ撲滅キャンペーンは恐怖心を煽りすぎて賛否があったが、結果的にはエイズ予防に有効だったという。

最後の展示はコーラスと呼ばれるデータインスタレーションで、ツイッターの匿名メッセージをリアルタイムで流し、誰もが潜在的な宣伝活動家になれることを暗示していた。ウェルチ氏は、様々なメディアによって情報が錯綜する今日、プロパガンダそのものは中立的で、その意図を正確に読み取ることが重要だと展示カタログを締めくくっている。あらゆる媒体で双方向に往来する大量の情報を整理し、付加価値をつけて提供することは図書館の重要な役割でもあると考えさせられた展示だった。

（さわだ　ゆうこ／アジア経済研究所　図書館）

《参考文献》

●David Welch著「Propaganda: power and persuasion」（British Library, 2013）
《大英図書館展示ウェブサイト》
●http://www.bl.uk/whatson/exhibitions/propaganda/index.html